

「存在の耐えられない軽さ」

霜 鳥 秋 則

(秋田公立美術大学 理事長/学長)



表題ですが

チェコ出身のミラン・クンデラの小説のタイトルです。「鮮烈でエロチック…。プラハの悲劇的政治状況下での男と女のかぎりない愛と転落を、美しく描きだす哲学的恋愛小説」(アマゾンの宣伝文から引用)というからには学生時代には読みそうだが、(何を隠そう)実は読んでいない。高尚過ぎたか遊びで忙しかったか。後者のような気がする。タイトルが有名で聞いたことがあって記憶に残っているだけなのだが。

存在

小説とは全然関係ないけど、大学という“存在”を考えてみたい。みなさん幼稚園から始まり小中高校と進み場合によっては大学で勉強した(遊んだ)経験をお持ちだから「学校」と言われてもほとんど空気のような存在(つまり「軽い」存在)でしょう。そこで、そもそも大学があることでどのような意味があるか見てみたい。

まずは(順不同。ただし本誌が経済誌だから敬意を表して)経済的な意味から考察したい。文科省が公開している資料があって、ご近所の弘前大学を計算したものがある。(以下、細かな話なので飛ばして読まれても結構。10行ほど後の結論部分に進むも可)学部が5つ、大学院が11研究科それに学内研究所やセンターが12ある。学生数は約6,800人で教職員は約2,300人。この規模で経常経費は平成18年度で約292億円だ。外部資金としての研究費収入が約3億6,500万

円。これを大学(教職員の消費も含め)が県内県外分を分けて計算、学生関係も県外からの仕送り、県外からの学外者の訪問(宿泊や飲食)も細かく分析、病院では薬の購入や見舞客の消費(交通費)、教育研究の地域経済への誘発効果なども推測・・・てなわけでこの弘前大学のケースでは直接的な経済効果は約168億円、それから直接間接の雇用効果が4,800人に上るそう。 (美大の場合はこのデータから推測されたい。なお、飛ばし読みしたので間違いがあるかも知れない。下記参照されたし。)

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/07110809/005.pdf

集まる

次は人が集まるということ。そもそも大学は出入りはあるけど一定の人間の集合だから人が存在する。季節によっては受験生という臨時人口ができる。少子高齢化の時代に若者がうろろするのは街に活気が出る(普段はともかく休日は特に)。いつも繁華街に人があふれている東京や大阪などを見ると「毎日お祭りかい?」と驚くのが地方人なのだ。確かに、数年前に卒業展を開催する場所がなくて分散開催したら、会場間を往復する学生が目について、「ウイークデイに久しぶりに若い人たちを街中で見て良かった」と言われた。これを、「けがの功名」と言わずして何と言うべきか。

人口減に悩む地方の自治体にある私学が最近

公立化を進めているが、そこに学生がやってくると活気が戻ったようだ。つまり、学生募集に苦勞するじり貧の私大が地元自治体と協議して公立化に成功、初年度に一気に募集倍率が大幅に跳ね上がった例が少なくない。授業料の安さと地方公共団体が設置者という安心感が学生を呼ぶのだと思われる。

本学では75%ほどが県外出身だから親も含めた他県の人に秋田を知ってもらう効果がある。食べ物やお祭り、文化などなど。秋田ファンが増えるとうれしい。

香り

次にあげるのは、文化のかおり（「シクラメンのかほり」という歌があったが関係ない）。なんとなく格好がいいではないか（イメージだけだが）。文教都市だよとか芸術の雰囲気のある町だとか言える。地域の方々にとっても、犬の散歩にキャンパスを歩くだけではない効果がある。まして「美大」なんて小ぎれいでおしゃれの極み。もっとも美大生の服装は正反対だが。反対語は「工学系」かな。機械油や作業服を連想すればそうなる。とは言え、実験や実習のある工学系ではやはり華やかさに欠ける。やっぱり文学部とか美術などという方が“小ぎれい”というもの（自画自賛）。この点で美大を作った秋田市は賢明な選択だったかもしれない。

労働人口

ところで、大学を含めた高等教育機関は、一定数の若者を働かないカテゴリーに入れておく機能がある。つまり労働人口抑制の側面があるわけだ。別の視点から考えると、欧米と比べて若年失業が少ないのが日本だ。それは彼の地の雇用システムでは、解雇される場合は年数の少ない方から辞めさせられるので、年齢の高い長

期に働いている方が有利となっている。だから就職できない若者が街でブラブラする。一方我が国では逆だから若者の就職が優先。その上景気が悪くて就職できないときでも、高等教育への進学でそれを先送り可能とすることができている（明治時代は「高等遊民」と言っただろう）。昔、海外勤務のとき日本はなぜ若年失業がないか驚かれたことがあるが、この制度や慣行のおかげといえる。

美大生が変える

加えて学生の活動が地域を賑やかに明るくしていることは否めない。少し前のNHK「家族に乾杯」で秋田市の商店街の空き店舗に、美大の学生が作成した赤い円形の小さなカードが貼ってあるのが紹介されていたが、シャッター商店街でも、そこにどんなお店があつてどのような歴史があるか、読んで歩くだけでもその町が明るく豊かに感じられはしませんでしたか。いいアイデアだと思いました（これも自画自賛）。全国でも真似してくれたらいい。よく聞かれる「よそ者、若者、馬鹿者」が町を変えるということに繋がる話でしょう。

学生の視点

さて、この辺で観点を学生の側から見てみよう。学生が大学に進学する理由は何だろうか。一番多そうなのは、「みんなが行くから」だ。特に高等教育の進学率が約60%ともなると世の中の大勢となる。しかし、このことは逆に、大卒イコール「エリート」とはならない。まさに大衆化した大学なのだ。かつては「良い大学に入れば、良い会社に入れる」だった。ここで言う良い会社とは、一般的に大手企業ということになるが、この雇用パターンはそろそろ終わりになる。ただし、高卒と大卒の賃金格差はある

ので多少は大卒に有利とは言える。次の理由は、4年間のモラトリアム期間があるということ。就活や勉強を考えたら実際は2、3年ということではいけないけど、それにしてもこの間に友人ができたり、自分で考える時間がたっぷりある。多様な考えの人との交流というメリットもある。最近では良い結婚相手を見つけることができるというものもある。男女ともに大学進学率が大幅に増えたら、最低でも同じ学歴の人を結婚相手に考えている人が多い。

ちょっと見えにくい点ではあるが、大学で得られるコミュニティは人生の選択を有利に進められるメリットがありそうだ。大げさに言えば「重要な資産」なのである。典型例は慶応大のOB会の「三田会」が有名。メンバーではない方々からは排他的な印象で胡散臭く見られるけど、この結束力は侮りがたい。(早慶戦で有名な、一方の)早稲田の教授会にも三田会があるとかで笑ってしまったが、事実らしい。

ふるさと住民票

さて、見逃しがちな大学の「存在」を考察してきたが、ここで「軽く」地方振興策を提案してみたい。今や18歳を成人として選挙権が与えられている。学生を見ているとまだまだ幼いと思える時もあるが、しっかりしているように見えるときもある。読者諸兄も経験がある方もおられるでしょうけど、親元を離れた時に住民票

はどうしました。大体はそのままだったと思います。これを活用して地方に収入をもたらす手がある。学生では収入がないけれど、就職して所得税や地方税を払うようになったときに、「ふるさと住民票」を持てるようにしたら良い。そして実際の地方税の半分は出身の都道府県や市町村に回る仕組みを作ったら、もっと地方が豊かになれる。お正月やお盆に帰省する家族を見ていると、やっぱり地方とのつながりは大事だし懐かしい風景を作っているのではないかな。生活は都会でも心はふるさとにある。これを活用しよう。カテゴリーを増やすと「出身者＝高校までいた人、そこで勤務したことがある人、3回以上出張した人」に拡充もできる(これは霞ヶ関の某省の県人会にある)。政府の税制改正に向けて、県も市も商工会議所も要望と住民運動を繰り広げませんか。これはちょっと「軽過ぎる」提案ですか？



(実習棟)



(図書館 撮影/草薙 裕)

学 校 概 要

1 学 校 名	秋田公立美術大学
2 代 表 者 名	理事長/学長 霜鳥 秋則
3 所 在 地	〒010-1632 秋田市新屋大川町12-3
4 T E L	018-888-8100
5 F A X	018-888-8101
6 U R L	https://www.akibi.ac.jp
7 教 職 員 数	専任教員71名、職員47名
8 学 生 数	442人 (2019年5月1日現在)

9 基 本 理 念

- 1.新しい芸術領域を創造し、挑戦する大学
- 2.秋田の伝統・文化をいかし発展させる大学
- 3.秋田から世界へ発信するグローバル人材を育成する大学
- 4.まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学

10 附 属 機 関

美大サテライトセンター
(秋田市中通2-8-1 フォンテAKITA6階)